

浪江の

こころ通信

・第48号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

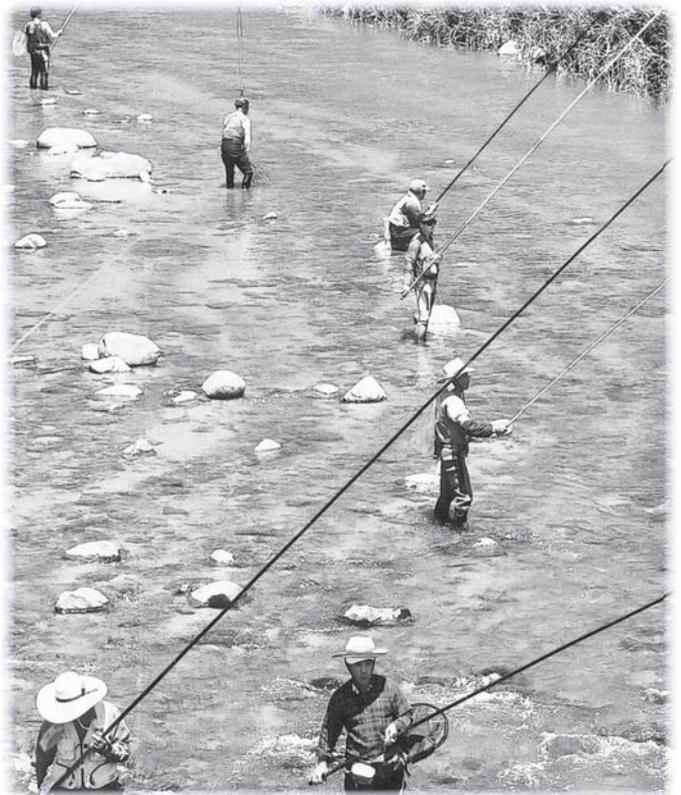
こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第48号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





神奈川県

梶井 靖夫さん・良子さん(田尻)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：4月21日

暮らし方は変わっても、今あるものを大事に

震災前は、富岡と浪江で写真館(株)サンフォートを経営していた梶井さんご夫婦。神奈川県の教会関連の住宅に避難し、愛犬と一緒に穏やかな暮らしを送っています。



▲梶井さんの写真が「アドベンチスト福祉会」機関誌の表紙に



▲梶井さんご夫婦と愛犬のナナ

■**現像所と写真館を営んでいました**
震災前は、写真の現像処理やコンピュータ画像処理、学校卒業アルバムの制作をしていました。浪江町と富岡町に店を構え、長女夫婦と2人のスタッフ、私たち夫婦のあわせて6人で働いていました。双葉郡内と

■**5回の転居**
避難していた津島地区は線量が高く危険ということで、三女の嫁ぎ先の裏磐梯に向かうため、長女家族を乗せて残雪の阿武隈山地を越えました。長女家族5人に私たち2人合計7人と三女家族6人あわせて13人、一挙に大家族となり、2世帯住宅

■**津島小学校へ**
震災後、すぐに津島小学校に避難し3泊しました。東京電力の仕事をしており、広報などで原子力発電の安全性について、耳にタコができるくらい聞いていましたので、避難所のテレビで、水素爆発の空高く立ち昇る灰色の煙の画像を見ても、何の恐れも感じませんでした。よもや、原子炉のメルトダウンで放射能漏れい事故が起こっていたとは思いませんでした。放射能が流れた方向などの情報開示が遅れたことに、町長が激怒したことは当然のことと思います。

南相馬市の一部の学校、幼稚園などあわせて17校を担当させていただきました。他に、結婚式の婚式写真撮影などもしておりましたので、本当に忙しかったですね。

■**暮らし方は変わっても**
日常の暮らし、仕事、地域のコミュニティ等、失ったものはたくさんありますが、新たに得たものも数多くあります。現在の住まいは、周辺に小学校、特別養護老人ホーム、ケアハウスなど教会関連施設が複数あり、都会の喧騒さをほとんど感ずることのない所です。故郷に帰還するのは断念するほかないと思、震災後に飼ったスピッツのナナと、2人と1匹の生活を送っています。

として建てられた家も狭く感じられるほどでした。親戚とはいえ私たちが快く受け入れてくれたことを今でも感謝しています。三女宅で10日間過ごしました後、川崎市登戸の次女のところに1か月滞在しました。その間、教会関連の知人、友人から「牧師館が空いているから避難してきては？」と奈良や横須賀、つくば：5か所からお誘いがありました。次女宅に近く、周辺環境の良い横浜市今の場所に落ち着くことになりました。津島を出てからのジブシー生活、通算5回の転居となりました。



福島県

菅野 信雄さん(川添)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：4月9日

健康第一を心がけながら、家族仲よく暮らしています

菅野さんは南相馬市小高区生まれ。20歳の時から東京で美容師の修業をされ、浪江で就職。同じ美容師の妻、真里子さんと、平成元年から震災前まで美容室『かぐや姫』を経営。さらに平成21年から、釣りの趣味と寿司職人だった10代の頃の経験を活かし、居酒屋『真釣り』も営んでいました。老後、悠々自適に暮らすための準備として、自宅に程近い所に店を開いたとのこと。

現在は、真里子さんと、元気に働く次女の3人で福島市笹谷東部仮設住宅にお住まいです。



▲菅野信雄さんと真里子さん。「焦っても仕方ないよ」と笑っていらっしゃいました。

■**残念なのは、一緒に避難した母の死**
5年前、大地震が起きた時は、居酒屋の仕込みが終わり、休憩中の出来事でした。あまりの揺れに立っていられず、ただ茫然と地震が収まるのを待つだけでした。その日は夜は服を着たまま、いつでも外に飛び出せる格好で床に就きましたが、母と私たち夫婦、次女と家族4人眠れないままでした。
翌日、避難命令が出ましたが、年配いた母と一緒にこの

福島市に来た当初は、県が実施するホールボディカウンタ測定のアルバイトで、1年半ほど添乗員を務めました。今は妻と二人、この家でんびりとそれぞれの趣味を楽しんでいます。妻は小物づくりなどの手芸、私はパーククラフトを習ったりしています。最近、テニスも始めました。週2回ですが、浜通りから避難されているメンバーもいます。
また、母は心労からか体調を

ともあり、遠くまでの移動は無理だと判断して南相馬市小高区の叔母の家に避難しました。3日目、小高区にも避難命令が出て、原町区の「ゆめはつと」に行きました。4日目から宮城県の実兄の家で3週間世話になった後、東和町の避難所で5日間を過ごし、さらに猪苗代町のヴィラホテルに約3か月滞在しました。7月に今の笹谷東部仮設住宅に入居

■**避難もここまで来たら、のんびり構えることに**
震災当初は、避難先で店を構え、ゼロから再出発することも考えましたが、私たちの年齢を考えるとあまりにもリスクが大き、今のこの生活を楽しむことにしました。ましてや東京で美容師をしている長女は、今のところ福島には戻らないようなので、今は福島市の復興公営住宅で暮らすことを考えています。

浪江町にはお彼岸やお盆の墓参り、一時期帰宅などで帰ることがありますが、除染はまだまだ進んでおらず、帰っても生活はできないでしょう。けれども、いつか遠い日に人が住める環境に近づき、あのきれいな海で釣りができたらどんなにいいだろうと思います。



山田 秀男さん(井手)

取材者：浪江町復興支援員 田中・石田 茨城NPOセンター・commons 横田
取材日：4月28日

住まいを求め、二人で歩いた4年間

山田さんは、原発災害により、福島、埼玉を経て2年数か月前にいわきに避難しました。いわき市にできていた浪江町民の会に参加し、奥さんと二人暮らしをしています。



▲浪江町の家で藤の花の写真を背にした山田さん

■妻を介助しながらの避難生活
震災前、地元の行政区長を務めていた時、妻が病で倒れ、妻を介助しながら生活していた。体が自由が利かなくなってきた。今回の大震災と原発事故で、今回の大震災と原発事故に遭遇しました。多くの町民が、つめかけた施設は混雑し、介助が必要な人が入る状態ではありませんでした。携帯と免許証しか持たずに家を出たため、小銭がなく電話もかけられませんでした。寒い中、車に妻を残して町を走り回った当時は本当に大変でした。二人で動ける

か、ガソリンがいつ底をつくか、不安を抱えながらもとにかく家族がいる所へ行こうと移動する途中、行く先々で再会した知人に助けられました。その後、家族の住む埼玉に避難しました。体が不自由な人が少しでも住みやすい部屋を見つけるために家族が協力してくれました。それでも、福島県外にいとやかなな福島の情報を得られませんが、一時帰宅するにも近い方がいいと思いいわき市で住宅を探そうと10回近く埼玉から家さがしに通いました。この時も、入口の段差が少ない家を見つけるのは苦労しました。漸く今の家が見つかり、いわきに来てからは、親戚の協力も得ながら新たな生活を始めました。そして、ある会合に出たことがきっかけで、いわき市に避難されている浪江町民で組織している絆会という自治組織に参加することになり、今は同会が運営する会館の当番をしたりしています。私は、コソコソとモノをつくるのが好きで、浪江町



▲浪江町で大事に育てていた藤の花

■町の人々への想い
いつも、こころ通信が届くのを心待ちにしています。それぞれの方が今どこでどうしているのかを知りたいと思うからです。通信を通じて、離れていても町民の皆さんとつながりたいと思います。

の自宅の塀には、丹精込めて育てた藤の花が毎年咲いています。今は、家ではパズルなどをして過ごしています。

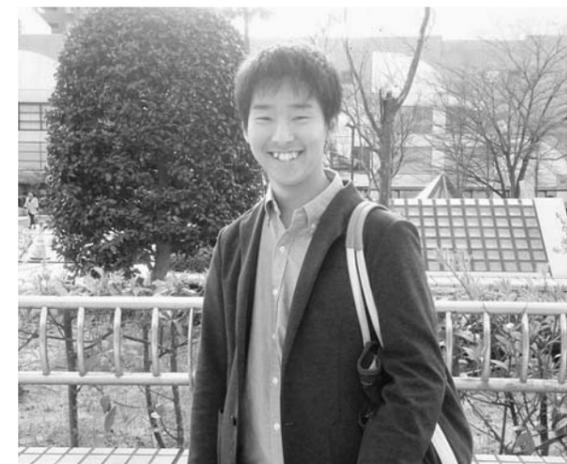


小野田貴行さん(大堀)

取材者：コミュニティ・ワークス 青木
取材日：4月18日

教師を目指して、邁進中！

この春から大学生となり、東北学院大学へ通い始めた小野田さん。美里町から仙台の泉キャンパスまで通学時間は2時間余り。ちょうど大学の講義が午後からという日に、キャンパスの近くでお話を伺いました。



▲人懐っこそうな笑顔が印象的な小野田さん

■野球一直線の10年
東日本大震災があり、その春中学3年になる時に美里町に来て、小野田中学校に転入しました。自分はそんな風を感じなかったけど「最初はガチガチだったぞ」ってあとから親に言われました。学校の友達がともフレンドリーに接してくれたので助けられました。高校は野球漬けの毎日。夏頃からピッチャーをやって、野手のバッティング練習のあと、走り込みをして足腰を鍛えていましたね。今は大学のサークルで週1、体を動かしています。自分は教員免許を取りたいので、そんなに忙しくないところで野球もやっていた

のでサークルに入りました。自分はもちろん楽天ファンです。大学の入学式が終わってからは、午後の楽天の試合を母と二人で観に行きました。野球をやっていた身としては、横山投手が活躍している姿は嬉しいです。自分は小学3年から野球を始めました。少年野球で当時中学生の横山さんが投げたくれたんです。球早くて打てなかったですけど(笑)。その時からズバ抜けていました。■教えることの楽しさ
大学が始まって朝が早いです。8時50分が1講目なので、5時半に起きて、家を6時半に出る、キャンパスに着くのが8時半頃。家から電車、地下鉄、バスを乗り換えて通っています。はつきりと教員を目指そうと思ったのは中学2年です。少年野球の監督をやっていた父親の姿を見ていて、俺も人に何か教えることが好きだったんです。数学が得意なので、それを生かして教員を目指すのもありかなと、そこから思い始めました。人に教えるのが楽しくて、解ってもらえた時の嬉しさがあるんです。

■教師になって、胸張って
高校3年の時、先生に声をかけてもらって「ビヨンドトゥモロー東北未来リーダーズサミット2014」に応募しました。250人くらい応募があったよ

うですが、56人の参加者の一人に。自分はいっていました。福島、宮城、岩手、被災3県の高校1年～3年生が対象で、最終的に自分たちが考えた復興企画をプレゼンテーションしたんです。初めは軽い気持ちで行ったんですけど、震災復興についてものすごく考えさせられました。もし自分が高校か中学の教師になったら、震災の時に小学1年生とか幼稚園児だった子に震災のことを伝えることになる。何があつたのか分からなくて、今に至っているだろうと思うんです。しかも地元のこと、浪江のこととか、全然分らない子もいると思うので、自分が教師になったら、教えていくのもありじゃないかと、考えるようになりまして。自分は地元のこととは忘れられないですね。生まれてからずっといたので。「自分は浪江町民だ」って胸張って言っています。

【参考】
●「ビヨンドトゥモロー」とは、東日本大震災により被災した若者のリーダーシップ教育支援プログラムのこと。
●小野田さんが参加した『ビヨンドトゥモロー東北未来リーダーズサミット2014』の様子は、YouTube(141011-13_BT_リーダーズサミット)の動画で見ることができます。またホームページ(<http://beyond-tomorrow.org/program/past-program/tfls2014/>)より、報告書(PDF)をダウンロードできます。



伴場 裕史さん
福島市在住。



佐藤 篤さん
福島市在住。



田澤 義秀さん
宮城県仙台市在住。



門馬 和彦さん
福島市在住。



石澤 孝行さん
西白河郡西郷村在住。



▲かなりの体力を要する獅子神楽。「幕舞」「幣束舞」「鈴舞」「乱獅子」の4種が演じられます。

石澤 本月初参加の佐藤君と20代前半の若者が数名、今年に入会してくれそうです。若者との出会いは少ないですが、次の世代の育成は不可欠です。今、浪江の時計は止まっています。でも巡り会える人とはきつと会えると思っと思っていますし、伝統芸能は失くしてはならぬものと思っっています。それから、今まで言っていなかったけれど、前の保存会でやっていった川添の盆踊りも復活させたいんです。

◆会の活動を通してどんなことを目指したいか、どんな明日を描いていらっしゃるか、聞かせてください

門馬 先行きは不透明ですが、若者や子どもたちと一緒に、できる限り川添神楽を継承していきたいです。

田澤 自分自身、先のことはいくわかりません。今できることを精一杯やりたいです。60歳くらいになって田畑を耕しながら、川添にみんなが戻って来るのを待ちたいという夢があります。

石澤 会の活動に子どもたちを巻き込みたいと思っています。多感な年頃に避難しているでしよ。「浪江」という名前やふるさとの印象も忘れないように、子どもたちへこの活動を発信したい。そして、浪江が地図から無くならないように、浪江を継ぐ者へ浪江を遺すにはどうしたらいいかを、一緒に考えながら活動したいです。今は小さなつながりですが、この思いを広げていきたいと思っています。

佐藤 避難先でも伝統を絶やさないようにしたいです。ふるさとに戻る事ができたら、また川添でやりたいです。

伴場 今のメンバーと一緒に活動することが楽しいから、続けたいです。実は子どもが生まれたばかりで、父として格好いい姿を見せてやりたいとも思っています。

石澤 会の活動に子どもたちを巻き込みたいと思っています。多感な年頃に避難しているでしよ。「浪江」という名前やふるさとの印象も忘れないように、子どもたちへこの活動を発信したい。そして、浪江が地図から無くならないように、浪江を継ぐ者へ浪江を遺すにはどうしたらいいかを、一緒に考えながら活動したいです。今は小さなつながりですが、この思いを広げていきたいと思っています。



福島県

石澤 孝行さん(権現堂)
佐藤 篤さん(権現堂)・田澤 義秀さん(川 添)
伴場 裕史さん(加 倉)・門馬 和彦さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：4月11日

ふるさとへの思いと人々への祈りを込めて、川添神楽、新たな出発



▲4月18日に本宮市で行われた「しらさわ桜まつり～復活！桜と花火の競演 請戸川リバーライン桜まつり～」で披露されました。

明治40年頃、修行を積んだ地元の神楽の名人が村人に披露したのが始まりとされ、脈々と受け継がれてきた獅子神楽。正月に悪魔祓いや豊年万作の祈願をしながら舞い歩くこの伝統芸能は、踊り手（前かぶりと、「尻尾持ち」と呼ばれる後かぶりの2名）と、横笛や太鼓などの囃子方で編成され、川添地区の住民の方々が代々務めてきたそうです。

震災以前から神楽を行ってきた40代の男性たちが中心となり、新たに結成されたのが「浪江町川添芸能保存会」です。東日本大震災と原発事故からの避難によって地区の人々が離散してしまっただ中で、ふるさとの伝統芸能を再び継承することによって、人と人をつなぎ、ふるさとの記憶を風化させない活動が始まりました。今年の元旦に東北地域の仮設住宅数か所でお披露目を行い、4月18日に本宮市で開催される「しらさわ桜まつり」では一般の方々にも披露されました。



▲笛の担当（豊永和洋さん）がもう一人いらっしやるそうですが、残念ながらこの日は欠席でした。



▲取材当日、初めての話が飛び出したり、それぞれの思いが語られたり、賑やかなインタビューとなりました。

◆浪江町川添芸能保存会（以下、会）に参加したきっかけについて、聞かせてください

石澤 震災後、気持ちが落ち込んでしまい、人に会いたくなくなりました。でも偶然に、しかも川添で門馬さんと田澤さんに再会して、声をかけられました。田澤 避難して、地域の同じ境遇の仲間と集まれるきっかけというか、何か一緒に取り組むことができなかつて、ずっと思っていたんです。門馬 20代前半から盆踊りとか神楽をやっていました。震災から5年が経って、歳と共に体力

が落ち、年月が経つにつれて、今やらなきゃ復活させるのは難しくなると思いました。伴場 震災前、神楽をすることが楽しかったんですよ。それが一切無くなってしまい、石澤さんから再開したいという話を聞いた時、仮設住宅を廻って、みんなに喜んでもらえたら嬉しいなと思って参加を決めました。佐藤 今日が初稽古なんです。震災前、保存会には「来年は入れよ」って言われていました。震災後、再び集まれたので、このつながりを大事に、楽しくやっていきたいと思っています。